

2015年8月8日 作成

8月31日 rev.

## 第48回(通算第173回)放射線防護研究会

「福島第一原子力発電所の事故から五年を振り返る(その3)」の概要報告

日時：2016年6月18日(土) 14:00~17:40

場所：(株)千代田テクノル 本社2階 会議室

参加者：65名

プログラム：

司会：高橋 浩之

NPO 放射線安全フォーラム副理事長、東京大学大学院工学系研究科教授

講演：

(1) 五年間で変わったこと、変わらなかったこと：

3.11からの社会的学習を考える

寿楽 浩太(博士(学際情報学)東京電機大学未来科学部人間科学系列 助教)

(2) 福島の現状を題材にいま必要なことを考える：

Opinion・Justice から Fact・Fairness へ

開沼 博(立命館大学衣笠総合研究機構特別招聘准教授)

コメント：

山口 一郎(NPO 放射線安全フォーラム理事、国立保健医療科学院)

## 1. 開催趣旨：

福島第一原子力発電所の事故の発災から、間もなく五年の歳月が経過し、2017年4月までには、人々が強制的に避難させられた地域の大部分で、避難指示が解除されようとしています。発災から五年目という時点で、これまでに「なされたこと」と「なされなかったこと」を総括し、様々な観点から反省することは、被災地の復興をより合理的に進める上で重要だと考えます。

放射線安全フォーラムでは「福島第一原子力発電所の事故から五年を振り返る」というシリーズの放射線防護研究会を企画し、2月に開催された第一回では、被災者の視点と支援者の視点からの報告が行われ、4月に開催された第二回では、原子力発電所のサイト内の状況が報告されました。

そこで、6月の放射線防護研究会では、原子力発電所の事故とそれに引き続く五年間を、社会科学的な観点から俯瞰して戴き、理工学的な立場の人間が今後のどのように被災地の復興を支援して行くべきか、意見を交換する機会にしたいと思います。（多田順一郎：NPO放射線安全フォーラム理事）

### （概要）

寿楽浩太氏は、3.11からの社会的学習が考察されました。大変な経験を踏まえて、社会はよい方向に変化したのか？被害や問題は解決に向かっているのかが議論されました。詳しくは当日の講演資料をご覧くださいと思います。

開沼博氏は、氏の著書である『はじめての福島学』に沿って事実関係の確認を試みられました。固定化されたイメージを取り除く試みで、福島の復興の妨げとして、風評被害があり、それを招く発言は、不安と無知に基づくものであるものの、事実関係として正しくない情報が、被災地だけではなく、広い範囲で風評被害をはじめ、様々なかたちで弊害をもたらしているとの考えに基づき、それを打開することをこの研究会でも試みられました<sup>1</sup>。皆様の認知の偏りは修正されたのでしょうか？また、クラウド・ファンディングも利用して進められている福島第一原発廃炉独立調査研究プロジェクト<sup>2</sup>の紹介もありました。

---

<sup>1</sup>[http://www.huffingtonpost.jp/2016/06/19/fukushima-decommissioning-encyclopedia\\_n\\_10557454.html](http://www.huffingtonpost.jp/2016/06/19/fukushima-decommissioning-encyclopedia_n_10557454.html)

<sup>2</sup><http://www.1fpj.org>

## 会場での議論

これらの講演を受けて、今回の研究会の企画を最初に検討された多田理事が語られた『放射線安全の専門家、5年後の反省』<sup>3</sup>を題材にRSFへの活動の批判の例を紹介させていただきました。紹介させていただいたご批判は、(1)初期の対応への疑念：地域住民に避難や防護のノウハウを伝える努力をしなかったのではないかと、(2)活動の動機への疑念：(異論の)封じ込めのために、原子力村のエージェントとしての役割を忠実に演じていた本音(除染は効果なし)を言うことで共感を得ようとしている気がしてならない、(3)重要な問題への言及を避けているのではないかととの疑念：本音(除染は効果なし)を言うことで共感を得ようとしている気がしてならないが、これの次が大事で、そのまま我慢してもいい程度なのか、避難や賠償対象なのかという点は触れることがないのはズルいと感じられません、の3点です。最後の疑念は、アンフェアさへの怒りが表明されており、公共的・規範的な視点に基づくものではないかと考えられます。

その一方で、このような予防焦点モードと、そこで暮らしていくと決めた場合にプラス材料を確保しようとする促進焦点モードは、対立したものとなり得えます。このような対立を乗り越えて行くには何が必要でしょうか？

総合討論の後半は、社会学者に対して、課題をどう考えるかが参加者から投げかけられました。往々にして、このような問題への対応では、見解の違いが強調されることになりがちですが、より深く考察された課題の整理が社会学者から提示され、会場に知的な刺激を与えていました。会場の参加者の基本的な考え方は異なる面もあり、それが会場からの意見の多様さにも表れていましたが、寿楽氏により積み重ねられた論理は、その違いを超えて感銘を与えていたのが印象的でした。

以上

「コメント担当理事：山口一郎」

---

<sup>3</sup><http://webronza.asahi.com/science/themes/2016053100002.html>